

## 広津和郎『神経病時代』におけるヒステリー：「性格破産者」との相関関係を中心に

朴, 美柁  
九州大学大学院地球社会統合科学府：博士課程

<https://doi.org/10.15017/2557093>

---

出版情報：Comparatio. 23, pp.13-22, 2019-12-28. Society of Comparative Cultural Studies, Graduate School of Social and Cultural Studies, Kyushu University

バージョン：

権利関係：

## 広津和郎『神経病時代』におけるヒステリー ―「性格破産者」との相関関係を中心に―

朴 美姪

一、はじめに

『神経病時代』は一九一七(大正六年)一〇月「中央公論」に発表された広津和郎の代表作である。それまでは評論家として知られていた広津は、この作品を発表し、文壇にデビューしたのだが、「神経病時代」の不満足から生れた「二人の不幸者」においてこの作品は失敗作であると自己評価をくだしている。永吉和隆は広津の自己評価について「同時代評を見るとこうした自己評価は主観的でも謙虚さでもなかった」(注一)といい、「主人公への集中的な感情移入、類型的な人物造形、抽象的な時代描写といった観念性は、広津が「粗雑」になった原因として挙げる紙数や時間的制約の問題だけに帰することはできない」(注二)と指摘している。一方、新見満雄は「広津がどのような自己評価をくだそうとも文学史的に見れば作家広津の文壇的処女作であり、それにふさわしい出来ばえである」とは間違いない。何故ならば、この作品が広津の生活史につきかわれた思想的蓄積、人間洞察の鋭さ、歴史感覚の豊かさがないまぜになって多彩な作品世界を構成しているからなのである」(注三)と述べている。

『神経病時代』は「中途半端な、方々に空き間のあるようなものが出来上ってしまった」(注四)という意味では完成度の低い、作家

広津のデビュー作ではあるが、人間広津の世界観や人間観を反映し、社会問題を鋭く批判しようとした作品であると考えられる。広津は自分自身を含む知識青年の「弱さ」から、いわゆる「性格破産者」という人物像を生み出し、その造形として『神経病時代』の鈴木定吉を描いたといえる。「性格破産者」の問題について定吉を媒介にしてあらわしているが、定吉の個人の問題にとどまらず、「現代の日本」の問題として取り扱おうとしたという意味で『神経病時代』という題名にしたのであろう。一方、橋本迪夫は「神経病時代」と名づけた理由は主人公とその友人達の「性格破産」にあり、この作の目的は当時の知識青年層の戯画を描くことにあつた」(注五)のだが、「悪役を描き出すことによって、性格破産者に幾分か同情を惹こうとしている」(注六)とその限界について指摘しているが、その悪役の代表者としては、主人公定吉の妻よし子をあげることができる。

『神経病時代』の冒頭には、定吉は「近頃憂鬱に苦しめられはじめた」(注七)とあり、「憂鬱」の原因として「第一には彼の家庭である」とされているが、主に「肉欲的なヒステリー」を起す妻よし子を鎮めるために行う性行為が定吉を苦しませ、「憂鬱」にしている。妻のヒステリーは一時的にしかおさまらず、ヒステリーを起すたびに同じ行為を繰り返さないといけない状況となっている。定吉はその妻と別れたくても、別れようと告げることすらできない弱い性格の持主として描かれている。おそらくこうした「性格破産者」の欠点を批判しようとしたと考えられるが、肉欲的なヒステリーの妻が悪役になることによって、同情を惹いてしまったという結果になったといえよう。しかし、肉欲的なヒステリーを起したからといって

妻を悪役と断定して良いのかという問題については議論の余地があると考えられる。定吉の弱い性格が妻よし子に全く影響を及ぼしていないとは言い切れないからである。

本稿では、「性格破産者」とヒステリーの相関関係について考察を行いたいと思う。「性格破産者」に対する再検討を行うことによって、作品の新たな解釈を試みたいと思う。

二、「性格破産者」たる者—チエエホフの影響をめぐって—

広津は『神経病時代』という題名について「あの作には少し大き過ぎる題名だ」(注八)といい、それでも「あの題名をつけようと思つた気持は、私のそれ迄に眼を触れていた現代の統一のない、色々な方面の生活を書いて見度いと思つたからだ」(注九)と述べている。特に「当時の青年層に対する反抗や疑惑」から日本の若い知識層の「時代」を描こうとしたが、かえって主人公定吉と彼の友人達を含む知識人層、つまり「現在の世の中の青年」(注十)という限定された人物像を通じて「時代」を描こうとしたために「大き過ぎる題名」になつてしまつたであろう。また、上記で述べたように『神経病時代』の執筆の際に「約束の七十枚以内に書けるもののような気がして筆を取つた。ところが、書き出して見ると、とてもそれ位の紙数には書けそうでない。(中略)まだそれでも到底足りそうにないから、もつと紙数を殖やして呉れるようにと、編輯者に交渉して見たが、承知して呉れな」(注十一)かつたため、分量的にも「時代」を語つたと言うには少しおおげさな題名だと広津自身は思つたであろう。

『神経病時代』の主人公定吉は弱い性格のために自主性を喪失し

た「性格破産者」として描かれている。山田昭夫は『神経病時代』において描かれている「性格破産者」の問題は広津の作品における第一主題であるとし、「性格破産者の発生的根拠はどこにあったか、(中略)世紀末の人間像という言葉があるが、この問題は、何といつても(世紀末)という文化現象の日本的特徴として顧みる必要がある」(注十二)と指摘している。世紀末的文化現象については「自然科学の急速・複雑な発展がもたらした近代生活における機械文明・物質主義によつて人間性が痛めつけられ、不健全な享楽や逃避によつてますます神経衰弱の状態におこまれていつた世界的頹廢現象」(注十三)であると説明を加えているが、このような世紀末的文化現象は「近代日本の大正期の文化現象にも、多かれ少なかれ認められる」(注十四)と述べている。

広津の「性格破産者」は世紀末的文化現象から生まれた人物像であり、『神経病時代』においては「大正期」という近代社会を生きる「性格破産者」の苦悩や煩悶を象徴するものとして「神経病」が用いられているといえる。「性格破産者」という言葉は、広津が訳した『接吻外八篇』(一九一六(大正五)年)の序文に収録された「チエエホフの強み」(注一五)の中で以下のように登場している。

チエエホフ程彼の住んでいた当時の露西亞を根本から理解した作家はなかつた。そして彼が当時の到底救う事の出来ない露西亞の消極的廢滅の病原菌として発見したものは、社会状態の不幸と云う事でもなければ、政府の圧迫と云う事であつた。彼は或る人から、「現代露西亞が最も要求すべきものは何か？」と訊ねられた

時、その間に直接には答えずに、「現代露西亞の最大不幸は性格の破産だ！」と云った。性格の破産！これはチェエホフの強みの見た当時の露西亞の墮落の病原菌だったのである。(注十六)

「露西亞の墮落の病原菌」は「性格の破産」として日本に流入したといえるが、渡辺暎子によると「そもそもこの言葉自体はチェエホフからとったものだ」(注十七)が、「チェエホフの側から調べてみると、そのものずばりの言葉はないものの、広津の言う「性格破産者」のイメージによく符合する発言がある」(注十八)ものとして、スヴォーリンに宛てた一八八八年二月三日の手紙があるという。「チェエホフの自作『イワーノフ』について解説しながら非常に熱っぽくロシア人論を展開した」(注十九)長文の手紙には、イワーノフのような人たちは問題の解決力がないため、その問題が重なり、疲れ果ててしまい、ついに自分を見失ってしまうと語られている。「チェエホフは、ロシア人が学校を出るとすぐ、自分の手に余る大きな思想や理想的事業にとりかかり、過度に熱中する結果、三〇や三五歳という若さでもう疲れ果て、氣力を失い、何もかも否定し始めるという「過度の興奮」と「早すぎる疲労」を、現代ロシアの問題としている」(注二十)と渡辺は述べている。ロシアの世紀末的な時代背景と日本の大正期の時代状況の類似さは「性格破産者」という人物像を媒介にしてあらわれている。

一九五一(昭和二六)年の七月号『文学界』に発表された「『神経病時代』を書くまで」においては「『神経病時代』の執筆に影響を及ぼした人物としてチェエホフが挙げられており、チェエホフに興味

を持った理由としては広津自身の「弱さ」による「懐疑的などころやニヒリスティックなところがあったからである」(注二一)と述べられている。広津は「性格破産者」を描こうとした理由についてはロシア文学から学んだインテリゲンチヤという言葉がインテリと単純化され、「インテリの弱さという事が始めてこの国で問題になって来た」(注二二)頃から「現代日本に一番憂うべき」(注二三)存在として「性格破産者」が「一番気になっていた」(注二四)ためだと述べている。

また、「一般にはトルストイズムが流行し、(中略)個性の生命力の無限の成長の可能が青年達を有頂天にしていたが、私はそんな風に光明的には物が考えられず、知識青年の事に当たったの実行力のない弱さというようなものばかりが目についていた」(注二五)と当時の状況についても述べている。広津の描く「性格破産者」の最も重要な性質というのは「実行力のない弱さ」にあるといえるが、その「弱さ」を批判的にとらえ、自分のような当時の知識青年を反省させようとすることに執筆の目的があったと考えられる。しかし、『神経病時代』においては、チェエホフに学んだ「弱さ」だけではなく、トルストイに影響を受けた「強さ」もうかがわれる。

### 三、肉欲的なヒステリー——トルストイの影響をめぐって——

一九一六(大正五)年の五月号『新公論』に発表された「チェエホフの強み」の内容に多少の訂正を加え、再び論じた一九一六(大正五)年二月の『トルストイ研究』に発表された「トルストイとチェエホフ」は、トルストイとチェエホフの比較を論じたものである。広

津はこの二人を比較して論じる理由について「チエーホフの傾向を述べるためには、彼とまるで正反対の傾向に行ったトルストイを引合いに出す事が便利でもあり、又意味のある事でもあるから」（注二六）と説明している。広津はチエーホフとトルストイが正反対の傾向を持っていると考えていたようである。

二人の容貌についても、チエーホフは「華奢ではあるけれども、決して浮ついたところの少しもない、真面目な、おちついた背広姿で立っている。ジェントルで、しずかで、如何にもひねくれずに教養を積んだ人の聡明を表しているその眼や唇」（注二七）と表現しているが、トルストイは「憤怒に燃え初めそうに思われる表情」（注二八）、「強い力を以て押つかぶせて来る厳肅さに先ず心を撃たれる」（注二九）としている。広津はトルストイに対して片寄った見方をしているようにも思われるが、おそらくチエーホフと傾向が正反対であることを強調したかったためであろう。さらに、広津自身が「トルストイよりもチエーホフに同感を持って」（注三十）いたため、「チエーホフの傾向に対する方が、トルストイの傾向に対するよりもより親切にな」（注三一）ったからでもある。

チエーホフの「弱さ」の影響から定吉という「性格破産者」が生れたとしたら、トルストイからは、その「弱さ」と対比をなすものとして彼の「強さ」を受け入れようとしたであろう。『神経病時代』ではトルストイの『クロイツェル・ソナタ』が言及されているが、主に「肉慾的なヒステリーの発作」を起こす妻よし子が登場する場面において用いられている。おそらく広津がヒステリーを採用した理由にはトルストイの影響があったのではないかと考えられる。

『クロイツェル・ソナタ』はトルストイの晩年の中編小説である。不貞の妻を嫉妬したあげく殺してしまった主人公ボズドヌイシエフの告白からなっており、当時の結婚問題及び性欲問題について厳しく批判したものである。特に、出産や育児を女性の偉大なる業績であるとし、その時期に行う性行為は女性や子供に害を与えることであり、道徳的に純潔ではない行為であると非難している。青山太郎によると「一八八八年三月二〇日付ヂェルトコフ宛ての手紙から察するに、この頃のトルストイの性愛に関する考え方は未だ比較的穏やかなもので、結婚における性交は罪ではなく、むしろ神の意志である」（注三二）と考えていたのが、「ひとたび或る理念に取り憑かれたらそれをとことん突きつめずにはいられぬマクシマリストでしたから、その後幾度かの中断と改変を経て、一八八九年夏に作品がほぼ完成した時、そこに表明された理念は、夫婦間においてすら性交は慎むべきであるという極端な主張に達している」（注三三）たという。

トルストイの「過剰なまでの性行為に対する拒否感」（注三四）によって、正常な夫婦の性生活を営もうとする妻は肉慾的なヒステリーという烙印を押される。『クロイツェル・ソナタ』においては、そうした肉慾的なヒステリーを起す妻を殺すことによって、トルストイの唱える禁欲主義が「教訓話」として描かれている。つまり、『クロイツェル・ソナタ』におけるヒステリーは妻に不節制という烙印を押し、処罰することに一種の妥当性を与え、禁欲主義を唱えるために用いられた手段であるといえる。トルストイの「強さ」というのは、正義を実現するために、ヒステリーの妻を「処罰」する

という「実行力」にあり、広津はこの「実行力」に「強さ」があると思つたであろう。広津は定吉をボズドヌイシエフと同じ状況におくことによつて、「教を以て人生におつかぶせて行く作者」(注三五)のトルストイと「人を叱る事なく唯自然に人の心に自省を与えて行く作者」(注三六)のチェーホフの対比をあらわそうとしたと考えられる。

広津は「怒れるトルストイ」の中で『クロイツェル・ソナタ』を以下のように評している。

彼は「クロイツェル・ソナタ」が人生に或る利益を与えた事を自身している。現代文明の虚偽、殊に結婚生活の虚偽をあげて問題を提出したところには、多少の利益を与えたと云えるだろう。けれども、それ以上にそれは却つて人生に焦燥を与えている。静かな靈魂の所有者には「クロイツェル・ソナタ」は何でもない。恐ろしくイライラする退屈な物語であるに過ぎない。けれどもみずからの焦燥を支配する事が出来ずに悩んで、バラバラになつた統一のつかない良心を虫歯の神経のように露出している人間には、それは鎮痛剤にあらずして胡椒のような刺激物である。(注三七)

結婚生活の虚偽性による家庭問題、つまり「愛のない」結婚生活において問題とされている夫婦間の性生活の問題を、肉欲的なヒステリーを起す妻を殺すことによつて解決しようとしたトルストイの作品はチェーホフや広津のような「静かな靈魂の所有者」には「恐ろしくイライラする退屈な物語」としか考えられない。

トルストイの「強さ」は妻を殺すという考えを行動に移した主人公の「実行力」にあるが、ただし、妻を犠牲にせずには、得られないものである。広津はこうした『クロイツェル・ソナタ』について酷評しながらも、『神経病時代』において『クロイツェル・ソナタ』を用いたのは『クロイツェル・ソナタ』において問題となつていゝ「愛のない」結婚生活の虚偽性を「弱さ」の立場から取り扱うことによつて、「強さ」の立場から提示した家庭問題の解決策に対して批評を加えようとしたためであると考えられる。そのため、『クロイツェル・ソナタ』と同様に家庭問題として取り扱おうとした愛のない結婚生活の中に肉欲的なヒステリーの妻という人物を設定したのだが、結果的にその妻は「性格破産者」の弱さによる犠牲者となる。

#### 四、ヒステリーを誘発させる「性格破産者」

『神経病時代』の主人公鈴木定吉は近頃憂鬱になり「周囲の何も彼もがつまらなくて、淋しくて、味気なくて、苦し」く感じていた。他の少女に恋をしていた定吉は、躊躇している間に、大胆に誘いかけてくるよし子によつて、その時持っていた童貞を初めて失い汚してしまい、憂苦に襲われる。積極的なよし子によつて童貞を失い汚してしまつたとされているこの部分は、光石亜由美によると「女性の貞操を議論することから、女性の処女性を(奪う——奪われる)といった価値体系に転換させたのが「青鞥」の処女論争であるが、ここでは男性の「童貞」も(奪われる／汚される)といった観点から捉えられている」(注三八)というが、このような解釈ができるのは「愛のない」性的行為であつたからであろう。妻を愛さない定吉

は（奪われた）立場となり、妻は自然に（奪った）という、いわゆる（弱）と（強）の力学関係におかれているといえよう。

定吉の妻となったよし子は「二日か三日に一度、あるいは毎日」ヒステリーの発作を起したが、ヒステリーの原因については次のように記されている。

……昨夜も亦例のように、彼の妻の不機嫌が始まったのであった。それはいつでも何というはつきりした原因があるのでなかった。後で考えて見ると、何であったか思い出せない程些細な事からいつも始まるのであった。よし子は先ず最初に何という事もなくその不機嫌の気分が襲われて来るのである。

よし子のヒステリーは、はつきりとした原因はなく、「思い出せない程些細な事」で突然不機嫌になるとされている。しかし、実際は「過度の病的な不節制からくるヒステリー患者なんだ!」、彼の妻はあの肉欲的なヒステリーの発作を起こした」とあるように、性的な欲求不満が原因となっている。ヒステリーの原因について直接言及している場面において些細な事と大まかにし、原因不明であるかのように語られているのは、性的欲求不満によるものであることを強調させる結果になったといえる。

よし子のヒステリーの徴候については、以下のように書かれている。

その眼の陰が一層はげしくなつて、頬の辺りに筋肉が硬ばつたよ

うな無愛想な表情が浮んで来る。眉と眉との間がピクリピクリと痙攣する。唇が少し尖がて来る。そして眼だけ何処か部屋の一方をじつと瞬きもせず見つめながら、そのくせ顔は真正面から彼の顔に向けられる。

この兆候が現われ始めると、定吉の心はいつでも憎えて来るのであった。

ヒステリーの徴候は、眼の陰、頬の辺り、眉と眉との間、唇というように、顔に集中してあらわれているが、この描写からは、妻の顔が醜く感じられるほどに妻に対して愛情を欠いていることが分かる。さらに、徴候があらわれはじめると定吉の心はいつでも怯えてくる。とあり、妻のヒステリーを恐れているように語られている。その理由についてはこれに続く場面において推定できる。

「あなた」と彼女は囁いた。彼女の声は急にやさしくなつて、かすかな震えを帯びていた。と、突然眼前の物全体が自分の上に崩れ落ちて来たような心持が定吉はした。定吉の頭は渦を巻いた。

（中略）  
昨夜のような発作のあつた翌朝は、彼女は機嫌がよくて、にこにこしてゐた。

定吉は妻がヒステリー発作を起こした日は、妻の欲求不満を満足させるという方法を選び、妻のヒステリーを鎮めていた。高橋正雄によると、定吉は「妻の発作が性的な欲求不満に基づくものであり、

性的な欲求を満たしてやれば症状は治まること(注三九)を認識し、「妻の発作を治めるために性的な欲求に応えるという対応」(注四〇)を行っており、その行為が却ってヒステリーの「強化因子」となって彼女の発作を慢性・持続化させている(注四一)という。つまり、定吉を「憂鬱」にさせ、苦しませている妻のヒステリーは、妻の性的な欲求に応えてしまった定吉自身によって持続化しているのである。定吉とよし子の二人は「憂鬱」と「ヒステリー」という神経病に苦しむ生活を繰り返しているが、その不幸な結婚生活の発端となるのは定吉の「弱さ」からであるといえる。

定吉は最初他の少女に恋していたのであった。だが、彼は相手にそれを打明ける勇気がなくて、躊躇し悶々としていた。そこに彼の妻が現われて来た。彼の妻は彼女の方から彼に誘いかけた。彼が躊躇している間に、彼女はどんどん事をはこんで行った。すべてが定吉は受身であった。(中略)彼はその時まで持っていたものを彼女によって初めて失い汚してしまった時、取返しのない事をしたという憂鬱に襲われたのを思い出した。

よし子と結婚する以前、定吉が自分の「弱さ」のために最初恋していた女性に告白できなかったことが「愛のない」結婚生活の発端であるといえる。その女性に気持を「打明ける勇氣」があったのであれば、「愛のある」結婚生活ができたかもしれない。しかし、告白を実行できず「躊躇し悶々としていた」時に、積極的なよし子があらわれ、誘いかけてくるのを断れず、肉体関係を結んでしまうが、

山田昭夫は「鈴木は自分の純潔を(失い汚してしまった)」と感じているのだから、当初から愛は不在だったといわなければならぬ」(注四二)と述べている。それをきっかけによし子との「愛のない」結婚生活がはじまるのである。

まとめてみると、恋していた女性に告白できなかったこと、誘いかけてくるよし子に断れなかったことは、定吉の「実行力のない」「弱さ」から来ているのであり、その結果として「愛のない」結婚生活を余儀なくされたのである。一方、よし子の場合には定吉に積極的かつ能動的に愛を求めて性的な行為におよび、夫婦関係になったため、「愛のある」結婚生活であるといえるが、その生活において問題となるのは、定吉の態度である。

「あなた位何を云っても張合のない人はありませんね。あなたの顔を御覧なさい、まあ意気地のない顔をして、年百年中、ちつとも表情に変化がなくて、ただ弱々しくにたにた笑っていて……」よし子の声には次第に怒気が募って来た。

「一体あなたはあたしや坊をどう思っただらっしゃるの？」  
(中略)

彼女の眼は怒気を含んで興奮して光っていた。

定吉の消極的かつ受動的な態度は、よし子に愛情不足を感じさせ、ヒステリーを誘発しているといえる。つまり、定吉の「弱さ」は「愛のない」結婚生活の発端となり、そのような結婚生活の中で定吉を「憂鬱」にする妻のヒステリーの原因となっている。



『神経病時代』の妻は『クロイツェル・ソナタ』の妻と同じく、作者の教義のために犠牲になったとみることができる。そういう意味では「性格破産者」の「弱さ」を描こうとしたことには成功したとみることもできよう。さらに、妻のヒステリーを鎮めるために行った「愛のない性」、それがこの物語ではその結末で皮肉にも生殖に結びついてしま」（注四三）い、定吉は妻に離婚を告げることを実行できずに終わるが、この結末では「性格破産者」の弱い性格がまた新たな問題を作り出し、「憂鬱」になるという悪循環を暗示していると考えられる。

## 五、結び

本稿では、広津和郎『神経病時代』において「性格破産者」として描かれている主人公定吉と、ヒステリーの妻よし子との関係について考察した。「性格破産者」という人物像はチェーホフに学んだ「弱さ」によって生れたといえる。「性格破産者」の欠点というのは弱い性格にあるのだが、この弱い性格のために自分の考えを行動に移すことのできる実行力をも欠如している。そのため、定吉は好きな女性に告白することができず、自分より能動的なよし子と愛のない夫婦関係となり、妻の肉欲的なヒステリーを鎮めるために、性行為を繰り返すという憂鬱な日々を過ごすことになる。

「愛のない」結婚生活の虚偽性による家庭問題は、トルストイ『クロイツェル・ソナタ』の中では、実行力のある「強さ」の立場から妻を殺すという極端な解決策が出されているが、こうした方法に対して納得することができなかった広津は、「弱さ」の立場から「愛の

ない」家庭問題を取り扱おうとした。しかし、トルストイと同様に肉欲的なヒステリーの妻を家庭問題の主な原因とすることによって、『クロイツェル・ソナタ』の中で禁欲主義を唱えるためにヒステリーの妻を犠牲にしたのと同じく、「性格破産者」の「弱さ」を反省させるために、妻よし子を犠牲にしている。

一方、『クロイツェル・ソナタ』との違いといえば、『神経病時代』では、定吉を苦しませ、悪役を担うはずであったヒステリーの妻が、「性格破産者」の「弱さ」によって、かえって被害を受けていたのである。妻のヒステリーの原因、さらには妻のヒステリーを慢性・持続化させているのは、妻のヒステリーに苦しんでいると訴えている定吉自身の弱い性格のためである。ヒステリーを媒介にしてあらわれている定吉とよし子の家庭問題において、妻にヒステリーを誘発させた定吉にも責任があるといえるのであれば、定吉が必ずしも同情すべき人物であり、同情を引くような人物であると言い切れないと考えられる。

## 「注」

一、永吉和隆「『性格破産者』批判における「社会表象」について——広津和郎『神経病時代』——」『国文学研究』一六九号、二〇一三年三月、四九頁。

二、前掲注一に同じ。

三、新見満雄「『神経病時代』論——広津和郎の作家的出発——」『日本文学』二四（九）、一九七五年、二四頁。

四、広津和郎「神経病時代」の不満足から生れた「二人の不幸者」『広津和郎全集』第十三巻、中央公論社、一九七四年一月、四五頁。

五、橋本迪夫「広津和郎論―その「弱さ」と「強さ」―」『日本文学研究資料叢書 私小説』有精堂、一九八三年五月、七頁。

六、前掲注五に同じ。

七、広津和郎「神経病時代」『廣津和郎全集』第一巻、中央公論社、一九七三年一二月。以下、『神経病時代』の引用の出典は同じである。

八、前掲注四に同じ。

九、前掲注四に同じ。

十、前掲注四に同じ。

十一、前掲注四に同じ。

十二、山田昭夫「広津和郎論―第一主題の作品について―」『日本文学研究資料叢書 私小説』有精堂、一九八三年五月、二二頁。

十三、前掲注十二に同じ。

十四、前掲注十二に同じ。

十五、橋本迪夫によると「チェエホフの強み」は一九一六(大正五

年)の三月号『新公論』に発表された「チェエホフ小論」を改作したものであるとされている。(『廣津和郎全集 第八巻』中央公論社、一九七四年一月、五四一頁。)

十六、広津和郎「チェエホフの強み」『廣津和郎全集』第八巻、中央公論社、一九七四年一月、七三頁。

十七、渡辺聡子「広津和郎『神経病時代』の誕生とチェエホフの『決

闘』『ロシア・ソビエト研究』一五号、一九八七年三月、六九頁。

十八、前掲注十七に同じ。六九〜七〇頁。

十九、前掲注十七四に同じ。

二十、前掲注一に同じ。七〇頁。

二一、広津和郎「神経病時代」を書くまで『廣津和郎全集』第十巻、中央公論社、一九七四年一月、四四四頁。

二二、前掲注二一に同じ。四四五頁。

二三、前掲注二二に同じ。

二四、前掲注二二に同じ。

二五、前掲注二二に同じ。

二六、広津和郎「トルストイとチェエホフ」『廣津和郎全集』第八巻、中央公論社、一九七四年一月、一一七頁。

二七、前掲注二六に同じ。一一八頁。

二八、前掲注二七に同じ。

二九、前掲注二七に同じ。

三十、前掲注二七に同じ。

三一、前掲注二七に同じ。

三二、青山太郎「ロシアの性愛論―トルストイの『クロイツェル・ソナタ』―」『言語文化論究』(六)、一九九五年三月、一五一頁。

三三、前掲注三二に同じ。

三四、光石亜由美「広津和郎「神経病時代」論―トルストイ『クロイツェル・ソナタ』と『性慾論』をめぐる―」『情報表現論

集』(二)、一九九八年三月、三九頁。

三五、前掲注十六に同じ。七四頁。

三六、前掲注三五に同じ。

三七、前掲注二六に同じ。一六〇頁。

三八、前掲注三四に同じ。

三九、高橋正雄「精神医学的にみた近代日本文学(第六報)―岩野泡

鳴・広津和郎・佐藤春夫・宇野浩二』『聖マリアンナ医学研究

誌』一二(八七)、二〇一二年八月、八一頁。

四十、前掲注三七に同じ。

四一、前掲注三七に同じ。

四二、山田昭夫「和郎の「神経病時代」とその妻」『国文学解釈と鑑

賞』四〇(一三三)、一九七五年二月、一〇六頁。

四三、坪井秀人『性が語る』名古屋大学出版会、二〇一二年二月、

六四頁。